西部第一落合遺跡群（6）

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２５

前橋市教育委員会

西部第一落合遺跡群（6）

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２５

前橋市教育委員会

調査区全景（南から）

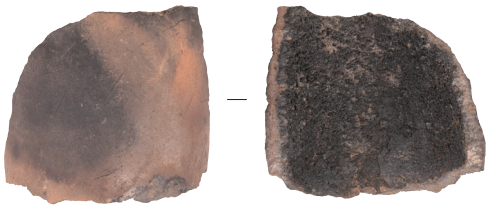
Ｗ－１全景（西から）

W−1溝状遺構（東から）

W−1平場状遺構（南から）

調査区北側全景（西から）

調査区北西部土層堆積状況（東から）



遺構外－２（1/6）

内面に煤が付着している瓦

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西部第一落合遺跡群（６）は古代上野国の中枢地域の調査であり、上野国府推定域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の確認はかないませんでしたが、西部第一落合遺跡群（１）で検出された古代の大溝の続きを確認することができました。こうした調査成果の積み上げが国府や国府のまちの姿の再現に繋がると考えております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和７年１月

前橋市教育委員会
教育長　　吉川　真由美

例　　言

1　本報告書は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う「西部第一落合遺跡群（６）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

遺跡名	西部第一落合遺跡群（６）（包蔵地名：前橋市 0142 遺跡）
遺跡コード	６Ａ 293
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町 2510-2、2511 の各一部
監理指導	阿久澤友之（前橋市教育委員会）
調査担当	佐野良平（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和６年７月 10 日～令和６年　８月 30 日
整理・報告書作成期間	令和６年９月　２日～令和７年　１月 31 日

発掘調査・整理作業参加者

丸山和浩　大川明子　細野竹美（技研コンサル株式会社）

秋山　修　新井　實　上沢公一　加藤知恵子　菊田武明　北爪二郎　高津邦道　土屋和美　富岡信行

萩原愛実　早川絵里奈　松下　明

3　本書の編集は佐野が行い、原稿執筆についてはＩを阿久澤、その他を佐野が担当した。

4　本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管されている。

5　下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北であり、座標については日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用した。

2　挿図に国土地理院発行 1/25,000『前橋』、1/50,000『前橋』・『榛名山』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3　遺構名称は、溝：W、土坑：D、ピット：Ｐである。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　溝…1/60、1/100　土坑、ピット…1/60　全体図…1/200

遺物　土器…1/3、1/4　瓦…1/4

5　本文および表中の計測値については（　）は現存値を、〔　〕は復元値を表す。

6　遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。その他各図トーンを参照されたい。

遺物実測図　　須恵器（断面）：　　灰釉陶器（断面）：

7　主な火山灰降下物等の略称と年代は次のとおりである。

浅間Ｂ軽石（As-B）・・・嘉承三年、天仁元年（1108）浅間山噴火による降下テフラ

榛名二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）・・・６世紀中葉の榛名山二ッ岳噴火による降下テフラ

榛名二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FA）・・・５世紀末～６世紀初頭の榛名山二ッ岳噴火による降下テフラ

浅間Ｃ軽石（As-C)・・・３世紀後葉～４世紀初頭の浅間山噴火による降下テフラ

目　　次

巻頭図版１
巻頭図版２
はじめに
例言・凡例
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
　1　地理的環境
　2　歴史的環境
Ⅲ　調査方針と経過 …… 4
Ⅳ　基本土層 …… 4
Ⅴ　遺構と遺物 …… 5
Ⅵ　まとめ …… 16
写真図版
報告書抄録

挿図目次

Fig.１　遺跡の位置
Fig.２　調査区位置図 …… 1
Fig.３　周辺遺跡図 …… 2
Fig.４　グリッド設定図 …… 3
Fig.５　基本土層 …… 4
Fig.６　調査区全体図 …… 7
Fig.７　Ｗ－１号溝（１） …… 8
Fig.８　Ｗ－１号溝（２） …… 9
Fig.９　Ｗ－１号溝（３） …… 10
Fig.10　Ｗ－１号溝（４） …… 11
Fig.11　Ｗ－２～４・６・７号溝、Ｄ－１～３号土坑、Ｐ－３・４号ピット …… 12
Fig.12　Ｗ－５・８号溝、Ｐ－５号ピット …… 13
Fig.13　出土遺物 …… 14
Fig.14　Ｗ－５周辺の溝 …… 17
Fig.15　西部第一落合遺跡群（６）周辺の古墳時代の景観想定図 …… 18
Fig.16　西部第一落合遺跡群（６）周辺の古代の景観想定図 …… 19

表目次

Tab.１　周辺遺跡一覧表 …… 2
Tab.２　西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表 …… 3
Tab.３　溝・土坑・ピット計測表 …… 15
Tab.４　出土遺物観察表 …… 15

写真図版

PL.１　調査区全景　Ｗ－１全景　Ｗ－１南側側面近景　Ｗ－１南側近景　Ｗ－１北側立ち上がり部全景
PL.２　Ｗ－１溝状遺構全景　Ｗ－１平場状遺構全景　Ｗ－１全景　Ｗ－２全景　Ｗ－３全景　Ｗ－３・６全景
PL.３　Ｗ－４全景　Ｗ－５全景　Ｗ－７全景　Ｗ－８全景　Ｄ－１、Ｐ－３・５全景　Ｄ－３全景　総社砂層堆積状況
PL.４　出土遺物

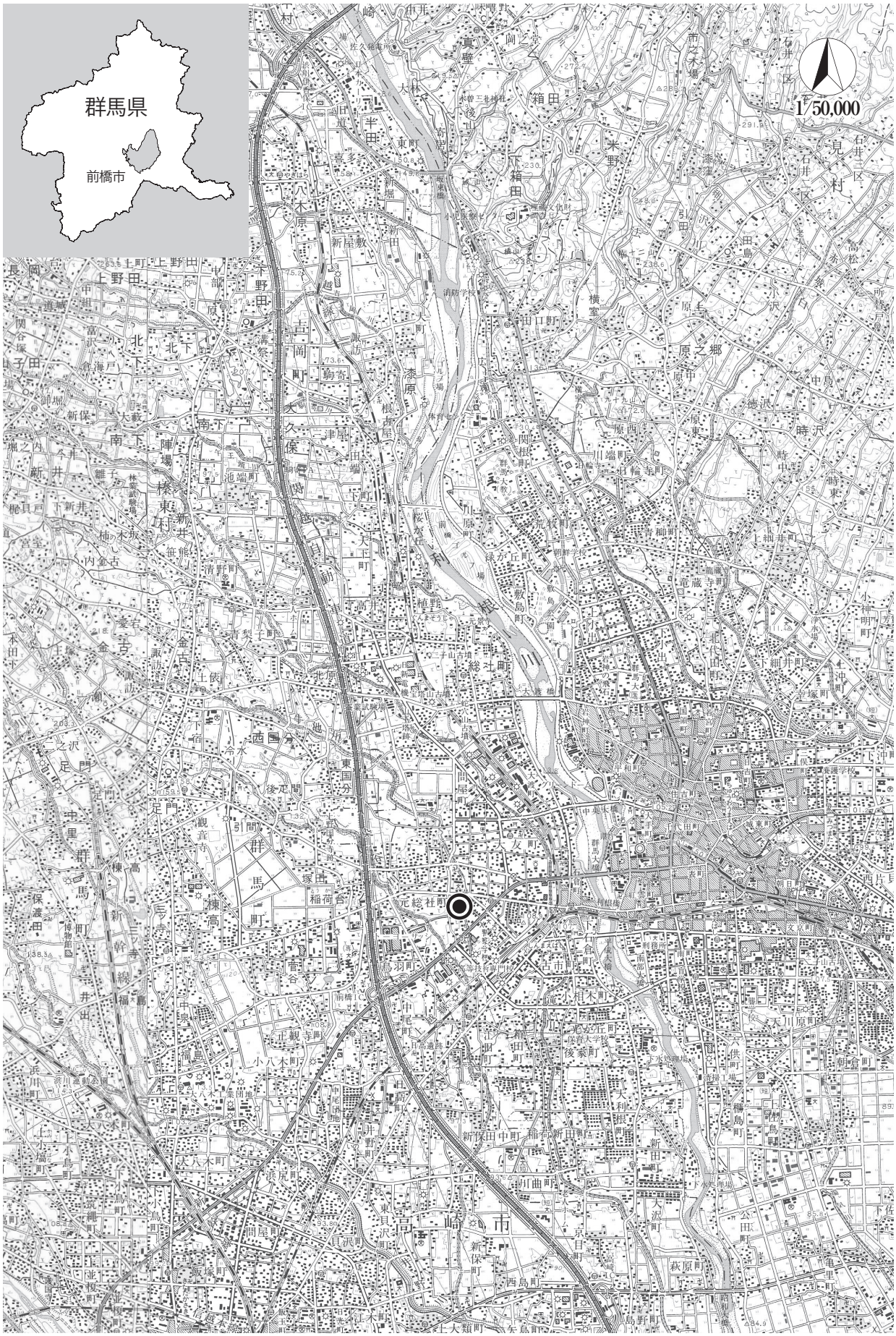


Fig. 1　遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長　小川　晶（区画整理課）（以下「前橋市」という。）が施行する前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴い実施され、６年目にあたる。本事業地周辺は、上野国府推定域が近接すること、北側では元総社蒼海土地区画整理事業に伴い、20 年以上に亘り発掘調査が実施され、数多くの貴重な調査成果を得ていることなどから、濃密な遺跡地として認識されている。

令和５年 10 月３日付けで前橋市より、埋蔵文化財確認調査についての依頼書が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。これを受け、市教委で同年 10 月 13 日に試掘確認調査を実施した結果、遺構が検出されたため、埋蔵文化財の取扱いについて前橋市と市教委で協議を行った。工事計画から遺構の現状保存は困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至った。

令和６年４月９日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意した。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年７月９日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「西部第一落合遺跡群（６）」（遺跡コード：6A293）の「西部第一落合」は土地区画整理事業名を採用し、「（６）」は当該土地区画整理事業において６番目に実施した発掘調査として付したものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

本遺跡が所在する前橋市元総社町は前橋市街地中心から南西約４km に位置し、市街地西端部にあたる。周辺は市街地化が進んでいるが、現在も畑地が多く残る場所でもある。遺跡南東約 200 m には国道 17 号線高崎前橋バイパス、北側約 200 m には県道 10 号線（前橋安中富岡線）、西側約１km には関越自動車道が南北に走っている。本遺跡の東西には相馬ヶ原扇状地を源とする牛池川と染谷川が流れ、両河川に挟まれた地域に遺跡は立地する。落合地区は榛名山南東に広がる相馬ヶ原扇状地から前橋台地といった平野部へと移行する地帯である。

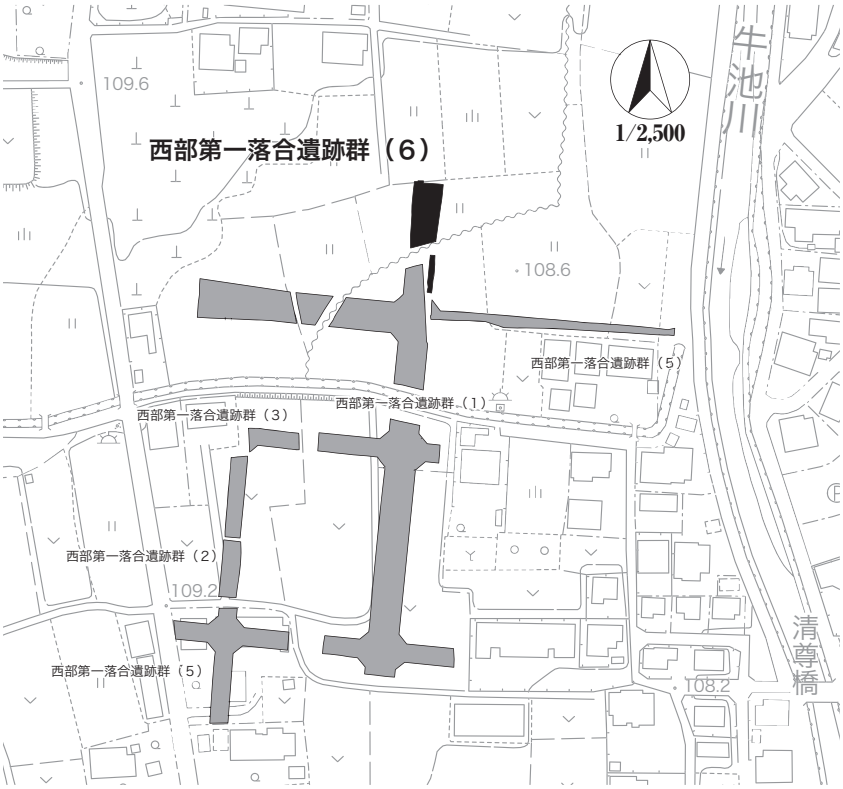


Fig. 2　調査区位置図

2　歴史的環境

前橋市の南西部に立地する本遺跡は、周辺域に上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域である。関越自動車道建設や元総社蒼海土地区画整理事業などに伴う発掘調査が継続的に行われ、これまで多くの遺構・遺物が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

縄文時代の遺跡は八幡川右岸の微高地上では産業道路東遺跡・産業道路西遺跡、染谷川左岸自然堤防上では上野国分僧寺・尼寺中間地域・元総社小見Ⅲ遺跡・元総社蒼海遺跡群（24）、牛池川左岸自然堤防上では元総社蒼海遺跡群（7）・（9）・（10）などが挙げられ、各遺跡で竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代に入ると当該期の遺跡は上野国分僧寺尼寺中間地域・正観寺遺跡などがあるが、その分布は散在的である。牛池川自然堤防上にあたる元総社寺田遺跡Ⅲでは後期の住居群が確認されている。

古墳時代になると利根川右岸の地域は県内でも有数の古墳密集地域となる。代表するものとして総社古墳群が挙げられ、古墳時代後期・終末期に亘り首長墓が多数築造される。この時期には山王廃寺が建立され、総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。この時代の集落は牛池川・染谷川沿いの自然堤防上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。

奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺・国分尼寺の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

落合地区周辺では高崎市浜川町周辺からＮ－64°－Ｅ方向へ東山道（国府ルート）が延びると推定されている。前橋市域では平成28年度上野国府等範囲内容確認調査45ａ・ｂトレンチにおいて２時期の両側側溝を持つ道路跡を確認している。鳥羽遺跡でも２条の道路跡が検出されている。日高遺跡では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。西部第一落合遺跡群（１）では推定東山道の駅路と考えられていた低地部から上幅18ｍ、深さ1.8～2.4ｍの大型の溝が確認された。溝底面の出土遺物や覆土中位にAs-Bが確認できることから古代に開削された溝と想定されている。

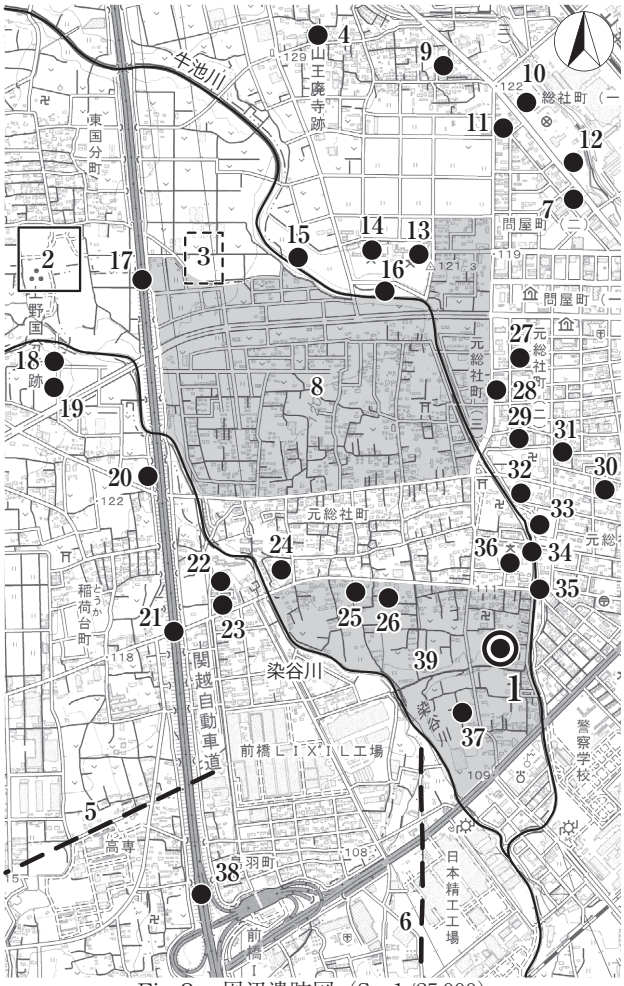


Fig.3　周辺遺跡図（S＝1/25,000）

Tab. 1　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名
1	西部第一落合遺跡群（6）
2	上野国分寺跡
3	上野国分尼寺跡
4	山王廃寺跡
5	推定東山道国府ルート
6	推定日高道
7	稲荷山古墳
8	元総社蒼海遺跡群 元総社小見遺跡・Ⅱ～Ⅵ遺跡 元総社小見内遺跡・Ⅱ～Ⅹ遺跡 元総社草作遺跡・Ⅴ遺跡 総社甲稲荷塚大道西遺跡・Ⅱ～Ⅳ遺跡 総社閑泉明神北遺跡・Ⅱ～Ⅴ遺跡 元総社宅地遺跡
9	昌楽寺廻向遺跡・Ⅱ遺跡

番号	遺跡名
10	産業道路東遺跡
11	産業道路西遺跡
12	稲荷塚道東遺跡
13	元総社中学校遺跡
14	元総社北小学校遺跡
15	元総社北川遺跡
16	元総社牛池川遺跡
17	上野国分僧寺・尼寺中間地域
18	元総社西川遺跡
19	上野国分寺参道遺跡
20	塚田村東遺跡
21	鳥羽遺跡
22	弥勒遺跡・Ⅱ遺跡
23	元総社弥勒遺跡
24	元総社早道乙遺跡

番号	遺跡名
25	天神遺跡・Ⅱ遺跡
26	天神Ⅲ遺跡
27	閑泉樋遺跡
28	閑泉樋南遺跡
29	屋敷遺跡・Ⅱ遺跡
30	堰越遺跡
31	堰越Ⅱ遺跡
32	大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡
33	元総社明神遺跡Ⅰ～ⅩⅢ
34	元総社寺田遺跡Ⅰ～Ⅲ
35	寺田遺跡
36	元総社小学校校庭遺跡
37	元総社落合遺跡
38	中尾遺跡
39	西部第一落合遺跡群

当該期の一般的な集落は、牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。

室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されている。天正年間以降は諏訪・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、慶長六年（1601）に秋元長朝が総社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。

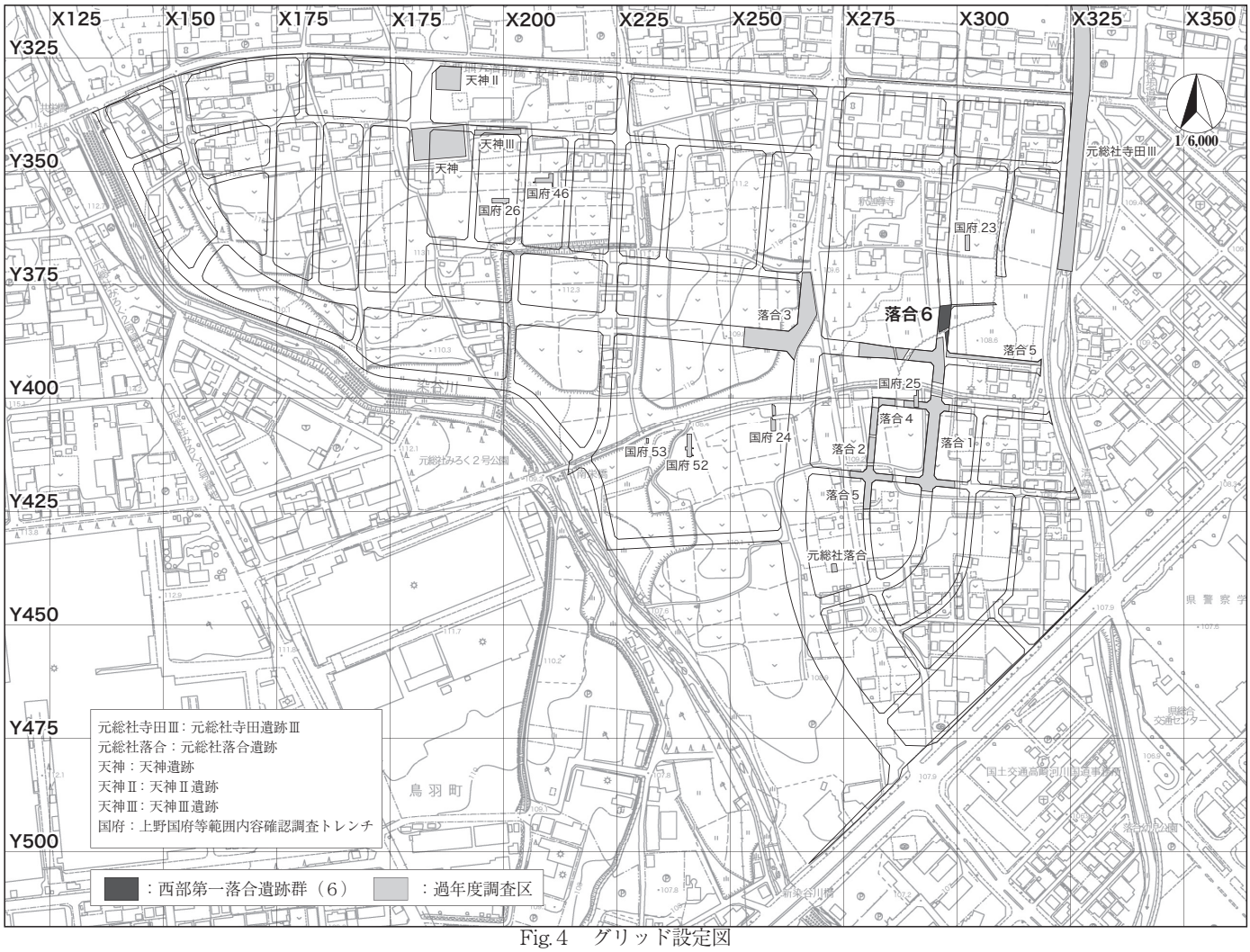


Fig.4　グリッド設定図

Tab. 2　西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表

遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
天神遺跡	1986	**奈良・平安**：住居跡、井戸、土坑　◇白磁・青磁・灰釉陶器
天神Ⅱ遺跡	1989	**奈良・平安**：住居跡、井戸、土坑　◇土師器・須恵器・石器
元総社寺田遺跡Ⅲ	1996	**縄文**：土坑　**弥生**：住居跡　**古墳**：住居跡、水田、畠　**奈良・平安**：住居跡、井戸、土坑、溝、河道跡　**中世**：蒼海城外堀、井戸**近世・近代**：土坑、井戸、畠　◇船形木製品・墨書土器（国厨・国・厨他）・漆付着土器・顔料付着土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・硯（円面・風字・転用）・人形・形代（馬形・刀形・琴柱形）・斎串・横櫛・漆器・軟質陶器・青磁・石塔・人骨・獣骨
天神Ⅲ遺跡	2008	**奈良・平安**：住居跡、掘立柱建物跡、道路状遺構　**中世以降**：堀・溝　◇八稜鏡・緑釉陶器・大型円面硯・須恵器香炉
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 23	2013	**平安**：住居跡、溝、土坑、ピット　◇黒色土器高台埦、灰釉陶器、軟質土器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 24	2013	**中世**：溝、土坑　**近世以降**：溝（芦田堰の一部ヵ）　◇土師器・須恵器・軟質陶器・常滑焼・獣骨
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 25	2013	**平安**：溝　**中世**：土坑、ピット、落ち込み　◇墨書土器（木・本）・刻書土器（五芒星）・灰釉陶器・獣骨
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 26	2013	**平安**：住居跡、溝　**中世**：道路状遺構　◇暗文坏・灰釉陶器・漆付着土器・羽口
元総社落合遺跡	2014	**奈良・平安**：住居跡、土坑　◇縄文土器（堀之内式）・土師器・須恵器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 46	2016	**古墳**：住居跡（4世紀代）　**奈良・平安**：住居跡、溝、土坑、ピット　**中世**：溝、土坑、ピット群（掘立柱建物跡）　◇台付甕・灰釉陶器・緑釉陶器・古銭（隆平永宝ヵ）
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 52	2018	**中世**：溝、ピット　**時期不明**：道路状遺構　◇灰釉陶器・黒色土器・青磁・茶臼
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ 53	2018	**近世**：染谷川旧流路ヵ
西部第一落合遺跡群（1）	2020	**古墳**：畠跡　**平安**：竪穴建物跡、溝、井戸、土坑　**中世**：蒼海城外堀　◇瓦（刻書「大田」）・灰釉陶器・緑釉陶器・鉄製品・銅製品（刀柄頭ヵ）・陶磁器・石塔・石鏃
西部第一落合遺跡群（2）	2021	**古墳**：畠跡　**飛鳥～平安**：竪穴建物跡、土坑　**中世**：井戸、土坑、ピット　◇緑釉陶器・灰釉陶器
西部第一落合遺跡群（3）	2021	**平安**：溝、井戸、土坑、採掘坑　**中世**：溝・堀、掘立柱建物跡、井戸、土坑、ピット　**近世以降**：畠跡、道路状遺構
西部第一落合遺跡群（4）	2021	**古墳**：溝　**奈良・平安**：竪穴建物跡、墓壙、土坑　**中世**：井戸　◇巡方、丸鞆、緑釉陶器・灰釉陶器
西部第一落合遺跡群（5）	2023	**古墳**：竪穴建物跡、水田、畠、溝　**平安**：竪穴建物跡、溝、土坑　**中世**：井戸、ピット　◇灰釉陶器・緑釉陶器・墨書土器・瓦（刻書「大」）・丸鞆（銅製品）
西部第一落合遺跡群（6）	2024	**古墳**：溝　**平安**：溝、土坑、ピット　◇土師器・須恵器・灰釉陶器

Ⅲ　調査方針と経過

委託調査箇所は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業地内であり、北側と南側の調査区に分かれている。調査面積は 265 ㎡である。グリッド座標については近隣調査との整合性や以後の拡張性を考慮して元総社蒼海遺跡群の調査で使用されている任意グリッド座標（国家座標（日本測地系第Ⅸ系）X＝ 44,000.000、Y＝－72,200.000 を基点とする４ｍピッチのもの）を使用した。なお経線をＸ、緯線をＹとして北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第Ⅸ系）	世界測地系（第Ⅸ系　測地成果 2011）
X 297、Y 383	X＝ 42,468.000 m、Y＝－ 71,012.000 m	X＝ 42,822.947 m、Y＝－ 71,303.7771 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.25 ㎥バックホー）にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。W －１については出土遺物等に細心の注意を払いながら重機での掘削を行った。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、遺構に伴うと判断したものは No 遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行なった。記録写真は 35mm 判 モノクロ・リバーサルフィルムと、デジタルカメラの３種類を用いて撮影を実施した。調査区全景についてはドローンを用い撮影を実施した。

調査経過については以下のとおりである。

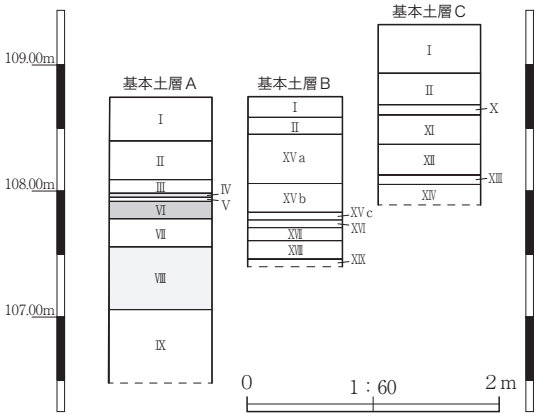
項目	１面	２面
表土掘削	令和６年７月 31 日～令和６年８月５日	令和６年８月 28 日
遺構調査	令和６年７月 31 日～令和６年８月 20 日	令和６年８月 28 日
調査区全景撮影	令和６年８月 21 日	令和６年８月 28 日
発掘調査完了検査	令和６年８月 28 日	
埋め戻し作業	令和６年８月 28 日～令和６年８月 30 日	

Ⅳ　基本土層

基本土層は北側調査区２箇所と南側調査区の１箇所、合計３箇所にて観察を行った。観察地点については「Fig. 6　調査区全体図」を参照。

低地部にあたる北側調査区では灰白色土（基本土層Ⅻ層、総社砂層）上面を第１面として遺構確認調査を行った。当初、第１面を Hr-FA 上面、第２面を Hr-FA 下面（C 黒面）と想定していたが、土層の堆積状況を観察したところ誤認していたと判明。そのため、第１面を総社砂層上面、第２面はＣ黒面とした。Ｃ黒面が残存する北西部以外は古代以降の削平を受けＣ黒面は消失している。

微高地にあたる南側調査区ではⅪ層を遺構確認面とし調査を行った。調査区は西部第一落合遺跡群（５）１区大溝の遺構内にあたる。そのため全体的に砂礫やシルトなどの砂質土層であった。



基本土層
Ⅰ　表土層
Ⅱ　暗褐色土（10YR3/3）　白色軽石を少量含む。締り有り、粘性有り。
Ⅲ　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色砂質土主体。締り有り、粘性有り。
Ⅳ　にぶい黄橙色土（10YR7/2）　Hr-FP 洪水堆積層。締まり有り、粘性有り。
Ⅴ　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色シルト層。締り有り、粘性有り。
Ⅵ　にぶい黄橙色土(10YR7/3)　Hr-FA 洪水堆積層。砂質土。締まり有り、粘性有り。
Ⅶ　黒褐色土（10YR3/1）　As-C 軽石を含む黒色土層。締まり有り、粘性有り。
Ⅷ　褐灰色土（10YR4/1）　As-C 軽石層。締まり有り、粘性弱い。
Ⅸ　暗褐色土（10YR2/3）　暗褐色粘質土。締り有り、粘性強い。
Ⅹ　黒褐色土（10YR2/3）　砂利層。締り有り、粘性弱い。
Ⅺ　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　砂質土。砂利少量含む。締まり有り、粘性有り。
Ⅻ　褐灰色土（10YR5/1）　褐灰色シルト層。砂利微量含む。締まり有り、粘性有り。
XIII　褐灰色土（10YR6/1）　褐灰色砂質土層。締まり有り、粘性有り。
XIV　褐灰色土（10YR6/1）　褐灰色シルト層。締まり有り、粘性有り。
XV　総社砂層。相馬ヶ原扇状堆積物（上部）。
a　浅黄橙土（10YR8/4）　シルト層。締まり有り、粘性強い。
b　灰白色土（10YR5/4）　シルト層。締まり有り、粘性強い。
c　灰黄褐色土（10YR6/2）　洪水堆積層。やや砂質。締まり有り、粘性有り。
XVI　黒褐色土（10YR3/2）　砂質土。締まり有り、粘性有り。
XVII　褐灰色土（10YR4/1）　浅間総社軽石（As-Sj）。締まりやや弱い、粘性弱い。
XVIII　黒褐色土（10YR2/2）　黒褐色粘質土。締まりやや強い、粘性強い。
XIX　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　砂質土。締まり有り、粘性有り。

Fig.5　基本土層

Ⅴ　遺構と遺物

１　概要

低地部にあたる北側調査区では総社砂層上面を第１面とし、第２面は調査区北西側でみられる As-C 軽石混入黒色土（C 黒）上面を遺構確認面として調査を行った。第１面では調査区の大部分（中央から南側）が古代から中世にかけての溝（Ｗ－１）に占められている。溝範囲外の北側では溝が５条、土坑３基、ピット２基が検出されたが、いずれも覆土状況から古代の所産と考えられる。第２面は調査区北西側の狭い範囲での調査となった。古墳時代の溝と考えられるＷ－８は大部分が調査区外であたり、今回の調査では東側の立ち上がりが部分のみが確認された。

微高地にあたる南側調査区は前述のＷ－８の埋没範囲内に該当する。そのため土層は砂質土が中心であった。検出された遺構は溝１条、ピット１基であり、２つとも古代の所産と考えられる。

２　溝

Ｗ－１号溝（Fig. ７～10・13、Tab. ３・４、PL. １・２・４）

西部第一落合遺跡群（１）で検出されたＷ－１と同一の遺構である。　**位置**　X295 ～ 298、Y380 ～ 385　**確認面**　第１面　**主軸方向**　Ｎ－70°－Ｅ　**規模**　確認長 10.02 m、上幅（13.52）m、下幅 4.35 m、深さ 2.75 m。**形状**　断面形状は階段状の逆台形を呈する。　**土層**　砂質土が主体。中～下位に As-B 軽石一次堆積層が確認できる。底面の状況については湧水が激しく詳細は不明だが、やや凹凸のある平坦であり、底面土層は固く締まった土であった。底面直上には砂利層の堆積が確認されている。　**施設**　溝北側中段に平坦な面を造り出している遺構（平場状遺構）が存在する。規模は長軸 4.06 m×短軸 2.63 m、主軸方向はＮ－50°－Ｗ。平面形状は隅丸方形を呈し、南方向以外に壁が立つ。壁高 0.35 m前後。底面は凸凹があるものの比較的に平坦である。柱穴は確認されていない。平場状遺構の北側には溝状の遺構が伸びる（溝状遺構）。規模は長軸 5.03 m×短軸 1.00 ～ 3.06 m、深さ 0.27 ～ 0.53 m、主軸方向はＮ－９°－Ｅ。底面は南から北へ向かって緩やかに上がる。遺構上端部が北から南へ向かって広がっていることから平面形状は三角形を呈する。この２つの遺構は位置関係や覆土状況が共通することからＷ－１に付随する遺構と考えられる。性格等については「Ⅵ　まとめ」にて考察を行っている。　**出土遺物**　灰釉陶器・須恵器・土師器の破片が出土している。主に平場状遺構の底面付近での出土が顕著であり、底面直上に砂利層（Fig. ８、22 層土の下位）が確認されていることから、流れ込んできた土器であると考えられる。覆土上～中位では中世に帰属すると考えられる土器も少量ではあるが出土している。中層以下で出土した灰釉陶器段皿（１）、須恵器埦（２）、上層で出土したかわらけ（３）を図示。　**時期**　西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－１の東側延長部分であり同一の溝であることや、底面付近に As-B 軽石一次堆積層が確認できることから、10 世紀以前に開削された溝と想定される。As-B 軽石堆積以降は水の流れはそれまでと比べ弱くなったようで、土層断面では底面に厚く堆積する砂・砂利層はあまりみられない。替わって砂礫が互層状に堆積する溝（Fig. ８、９・10 層土）が確認できることから、中世末頃までは小規模ながら絶えず水は流れていたと考えられる。西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－１では中世以降も流水の痕跡が見られ、近世頃に人為的に埋められた状況が確認されている。

Ｗ－２号溝（Fig.11、Tab. ３、PL. ２）

位置　X298、Y379・380　**確認面**　第１面　**主軸方向**　Ｎ－18°－Ｗ　**規模**　北側調査区の北東隅において、西側立ち上がり部のみ確認。底面の確認には至っていない。確認長 2.37 m、上幅（0.80）m、下幅不明、深さ（0.42）m。　**形状**　断面形状不明　**重複**　Ｗ－７と重複し、新旧関係は本遺構→ Ｗ－７である。　**出土遺物**　なし　**時期**　覆土に As-B 混土が含まれないことから古代の所産と想定される。

Ｗ－３号溝（Fig.11・13、Tab. ３・４、PL. ２・４）

位置　X296 ～ 298、Y379・380　**確認面**　第１面　**主軸方向**　Ｎ－80°－Ｅ　**規模**　しっかりとした掘り込みをもつ直線的な溝。確認長 8.36 m、上幅 0.92 m、下幅 0.47 m、深さ 0.25 ～ 0.35 m。　**形状**　断面形状は逆台形を呈する。底面は平坦。　**土層**　覆土上位に As-B 軽石混土層が堆積している。それ以下では As-B 軽石の堆積はみられない。　**重複**　Ｗ－４と重複し、新旧関係はＷ－４→本遺構 である。　**出土遺物**　土師器・須恵器の小片が出土。断面六角形の砥石（１）を図示。　**時期**　覆土状況から古代の所産と想定される。

Ｗ－４号溝（Fig.11、Tab. ３、PL. ３）

位置　X296、Y379 ～ 381　**確認面**　第１面　**主軸方向**　Ｎ－21°－Ｗ　**規模**　北側ではやや蛇行し、南側は直線的に走行する。確認長 6.67 m、上幅 0.42 m、下幅 0.21 m、深さ 0.10 m。　**形状**　断面形状は半円状を呈する。**重複**　Ｗ－３・６、Ｄ－３と重複し、新旧関係はＤ－３→本遺構→Ｗ－３・６である。　**出土遺物**　灰釉陶器碗の小片のみ出土。　**時期**　覆土の状況や重複関係から古代の所産と想定される。

Ｗ－５号溝（Fig.12・13、Tab. ３・４、PL. ３・４）

位置　X297、Y385 ～ 388　**確認面**　第１面。南側調査区で確認。　**主軸方向**　Ｎ－21°－Ｗ　**規模**　確認長 10.15 m、上幅 1.42 m、下幅 0.59 m、深さ 0.72 m。　**形状**　断面形状は逆台形を呈する。　**土層**　砂礫とシルトが互層状に堆積する。　**出土遺物**　須恵器・土師器が出土。土師器坏（１～５）を図示。５点とも溝の最下層から出土している。　**時期**　最下層から出土している土器の年代から溝の使用開始時期は８世紀代と考えられる。**備考**　走行方向から西部第一落合遺跡群（５）Ｗ－２と同一遺構とみられる本遺構は、西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－２とも接続関係が考えられる（Ⅵ章　まとめ参照）。その場合、西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－２は８～９世紀の年代と想定していることから、本遺構は８世紀代に開削され、９世紀代まで使用されていた溝と推測される。

Ｗ－６号溝（Fig.11、Tab. ３、PL. ２）

位置　X296、Y379　**確認面**　第１面　**主軸方向**　Ｎ－89°－Ｅ　**規模**　Ｗ－３に平行するように直線的に走行する溝。確認長 2.61 m、上幅 0.40 m、下幅 0.15 m、深さ 0.07 m。　**形状**　断面形状は浅い弧状を呈する。　**重複**　Ｗ－４と重複し、新旧関係はＷ－４→本遺構である。　**出土遺物**　須恵器・土師器が少量出土。　**時期**　覆土の状況から古代の所産と想定される。

Ｗ－７号溝（Fig.11、Tab. ３、PL. ３）

位置　X297・298、Y380　**確認面**　第１面　**主軸方向**　Ｎ－60°－Ｗ　**規模**　直線的に走行する溝。確認長 2.55 m、上幅 0.45 m、下幅 0.15 m、深さ 0.12 m。　**形状**　断面形状は浅い弧状を呈する。　**重複**　Ｗ－２と重複し、新旧関係はＷ－２→本遺構である。**出土遺物**　なし　**時期**　覆土の状況から古代の所産と想定される。

Ｗ－８号溝（Fig.12・13、Tab. ３・４、PL. ３・４）

位置　X295・296、Y380 ～ 382　**確認面**　第２面の As-C 軽石混入土面で確認された。　**主軸方向**　Ｎ－15°－Ｗ　**規模**　確認長 5.00 m、上幅（1.79）m、下幅（1.01）m、深さ 0.23 m。浅いピット状の窪みが２か所あり。性格は不明。　**形状**　断面形状浅い弧状を呈する。**出土遺物**　Hr-FA 洪水層土中から須恵器の坏身（１）が出土した。　**時期**　Hr-FA 洪水層によって埋没していることから、６世紀前半と想定される。　**備考**　Hr-FP 洪水層、Hr-FA 洪水層によって埋没していることから、西部第一落合遺跡群（５）１区で確認された南北方向に走行する大溝と同一の遺構と考えられる。

３　土坑・ピット（Fig.11・12、Tab. ３、PL. ３）

土坑・ピットはＰ－５を除き、すべて北側調査区の第１面で確認されている。灰白色の総社砂層を掘り込み、それぞれの埋土で覆われている。計測値については「Tab. ３　溝・土坑・ピット計測表」を参照されたい。

Ｄ－３は上層に総社砂層のブロックを含んだ砂質土、下層に総社砂層と As-C 軽石混入黒色土（所謂Ｃ黒）のブロックからなる粘質土が堆積し、中間層に炭化物粒を含んだ灰層が挟まる。底面には焼土も部分的にみられたことから建物跡ではないかと当初想定したが、出土遺物も少なく、建物跡としての決め手に欠けることから方形の土坑と判断した。

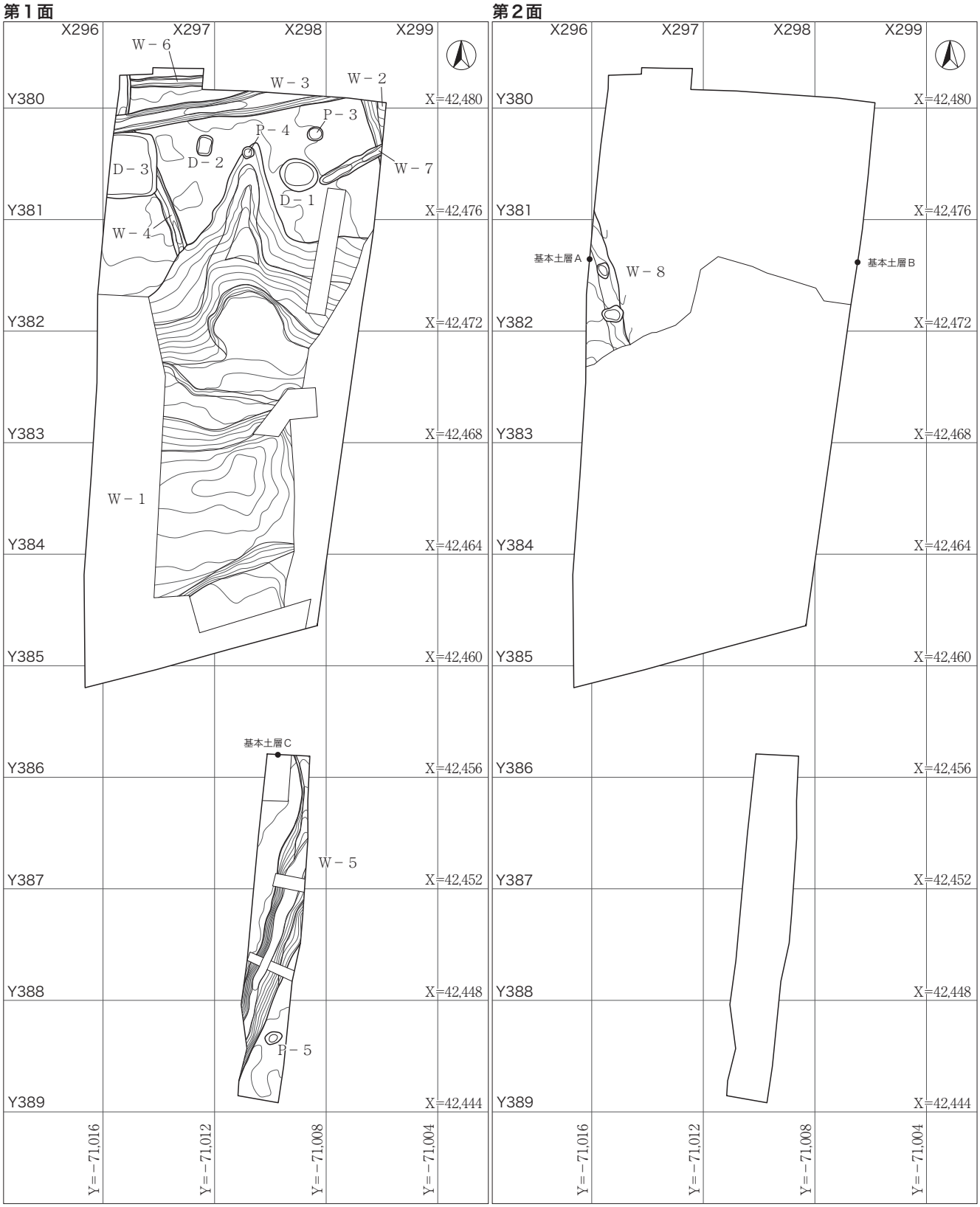


Fig. 6　調査区全体図（1/200）

W－1

Fig.7　W－1号溝（1）

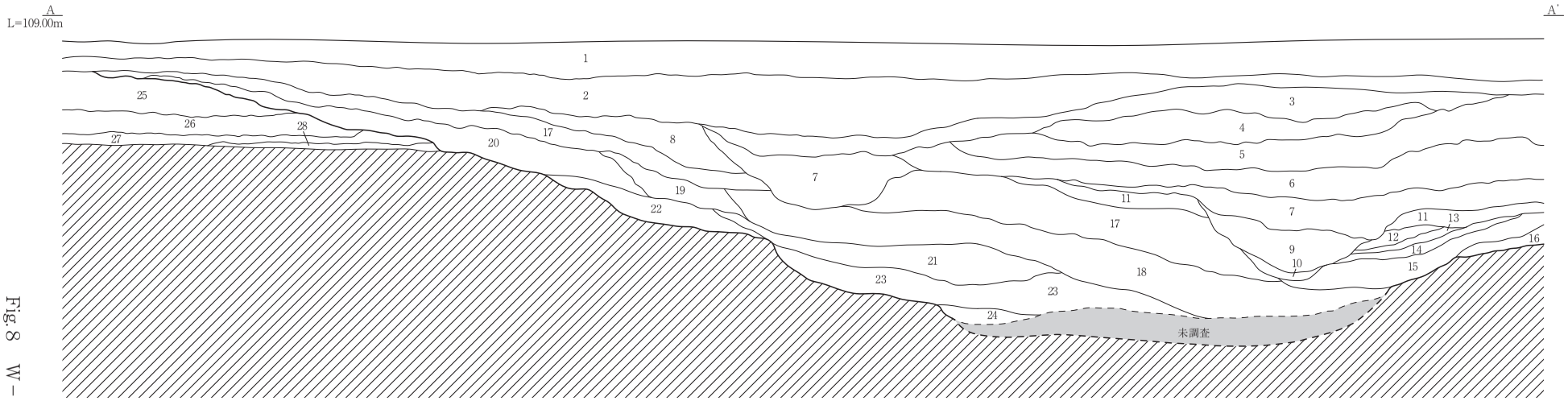


Fig.8　W－1号溝（2）

W－1号溝　SPA

1　基本土層Ⅰ層土
2　基本土層Ⅱ層土
3　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色砂質土主体。締り有り、粘性有り。
4　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土主体。白色軽石を少量含む。締り有り、粘性有り。
5　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色粘質土主体。白色軽石を少量含む。締り有り、粘性有り。
6　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土主体。締り有り、粘性有り。
7　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色粘質土主体。締り有り、粘性強い。
8　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土主体。As-B軽石混土を少量含む。締り有り、粘性有り。
9　褐灰色土（10YR5/1）　砂利と砂の互層。締り弱い、粘性弱い。
10　褐灰色土（10YR5/1）　粒径のやや大きい砂利層。
11　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色砂質土主体。As-B軽石混土を少量含む。締り有り、粘性有り。
12　褐灰色土（10YR4/1）　砂質土主体。締り有り、粘性弱い。
13　褐灰色土（10YR4/1）　褐灰色シルト層。締り有り、粘性有り。
14　暗褐色土（10YR3/3）　砂質土主体。締り有り、粘性弱い。
15　暗褐色土（10YR3/3）　粘質土主体。締り有り、粘性やや強い。
16　褐色土（10YR4/4）　褐色粘質土主体。砂が微量混じる。締り有り、粘性有り。
17　灰黄褐色土（10YR4/2）　As-B軽石混土層。締り有り、粘性有り。
18　As-B軽石一次堆積層。締り弱い、粘性弱い。
19　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色砂質土層。締り有り、粘性有り。
20　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色粘質土層。白色軽石を少量、総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性やや強い。
21　褐灰色土（10YR5/1）　褐灰色シルト層。締り有り、粘性有り。
22　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土層。下位に砂利が混じる。締り有り、粘性有り。
23　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色粘質土層。締り有り、粘性やや強い。
24　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色粘質土層。砂利が混じる。締り有り、粘性やや強い。
25　基本土層ⅩⅤa層土（総社砂層）
26　基本土層ⅩⅤb層土（総社砂層）
27　基本土層ⅩⅤc層土（総社砂層）
28　基本土層ⅩⅥ層土

※未調査部分は湧水が激しく壁面崩落のおそれがあるため調査を断念。底面ラインは他箇所からの復元。

0　1：60　2m

Fig.9　W－1号溝（3）

W－１溝状遺構・平場状遺構

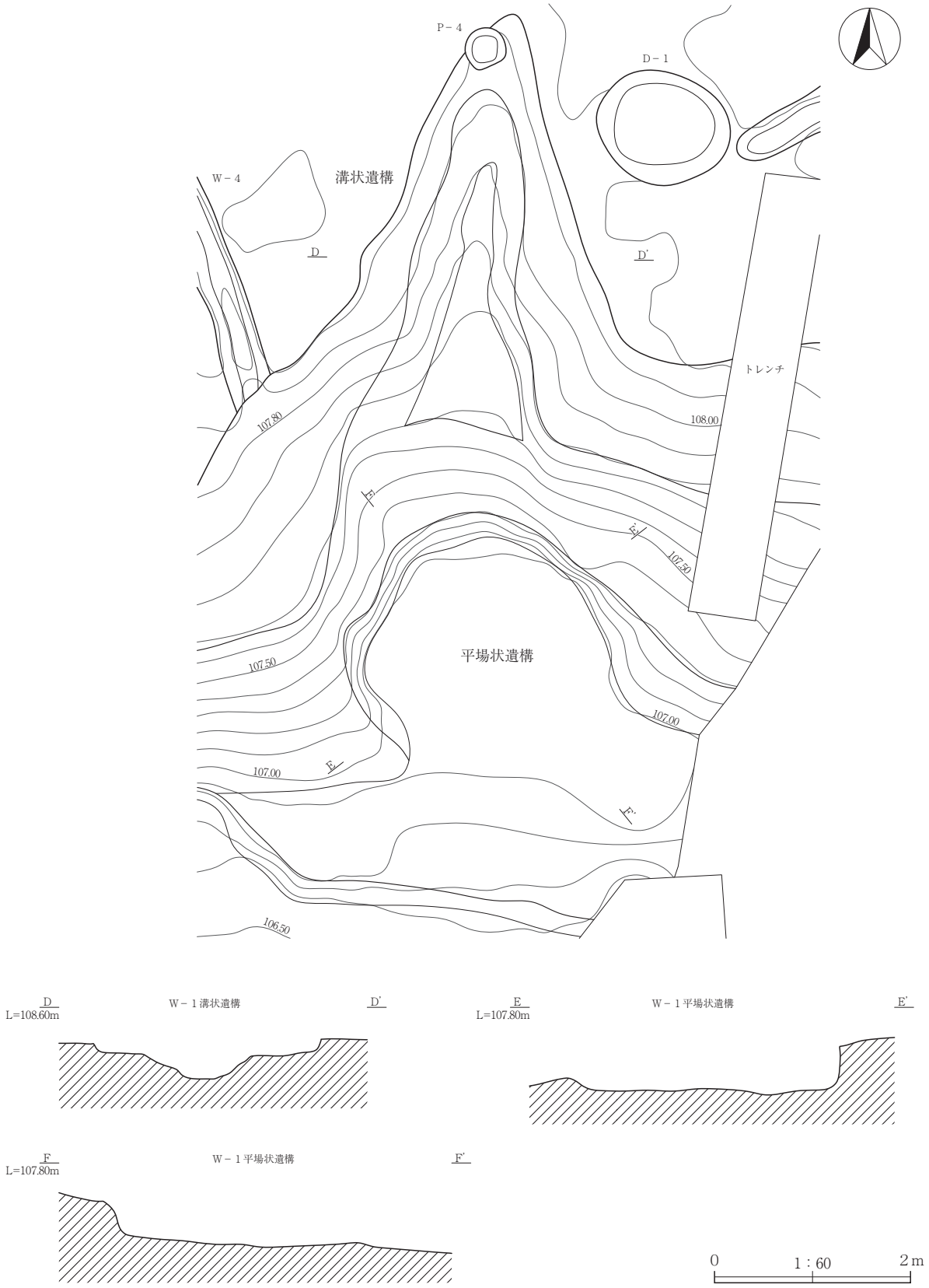
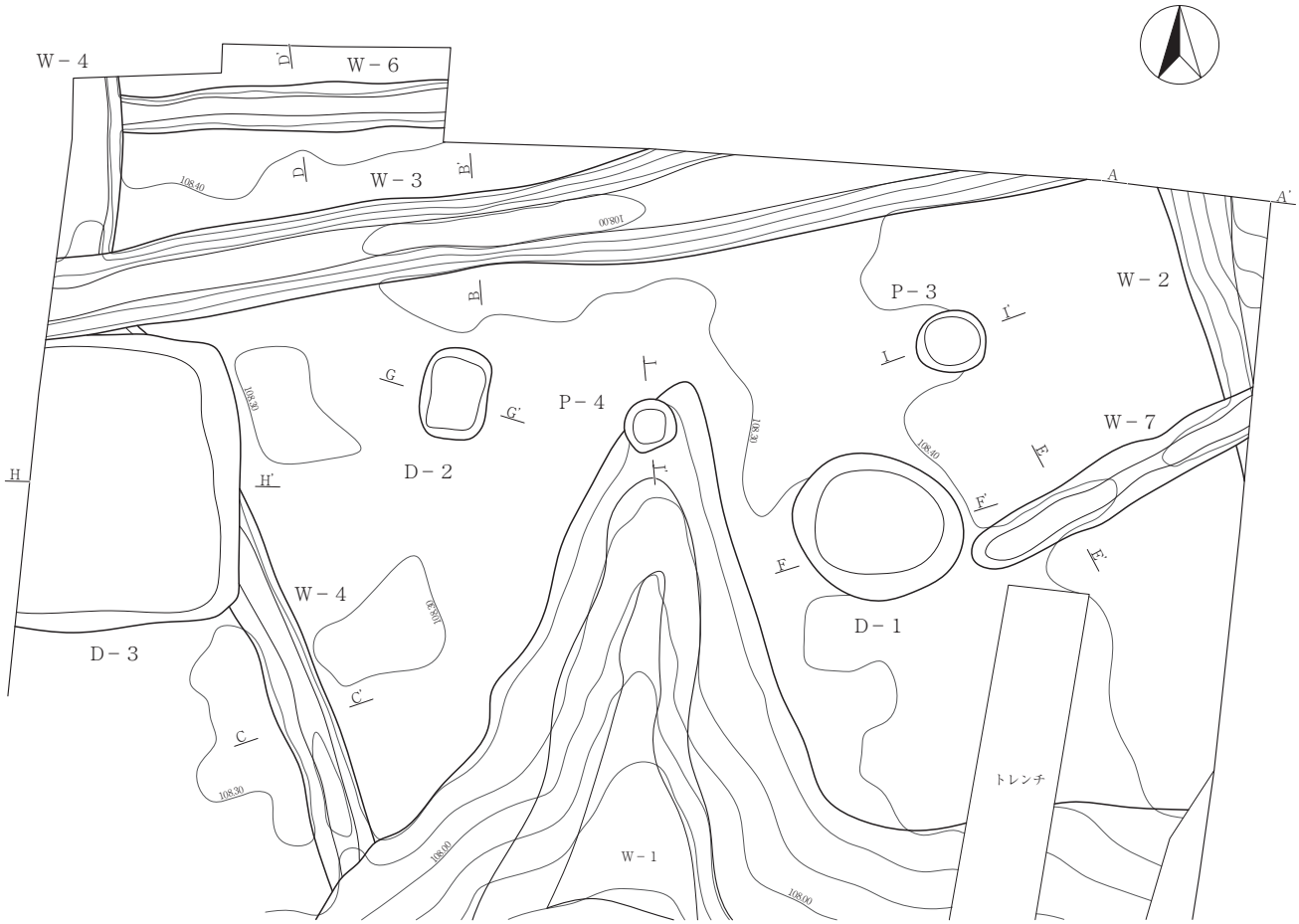
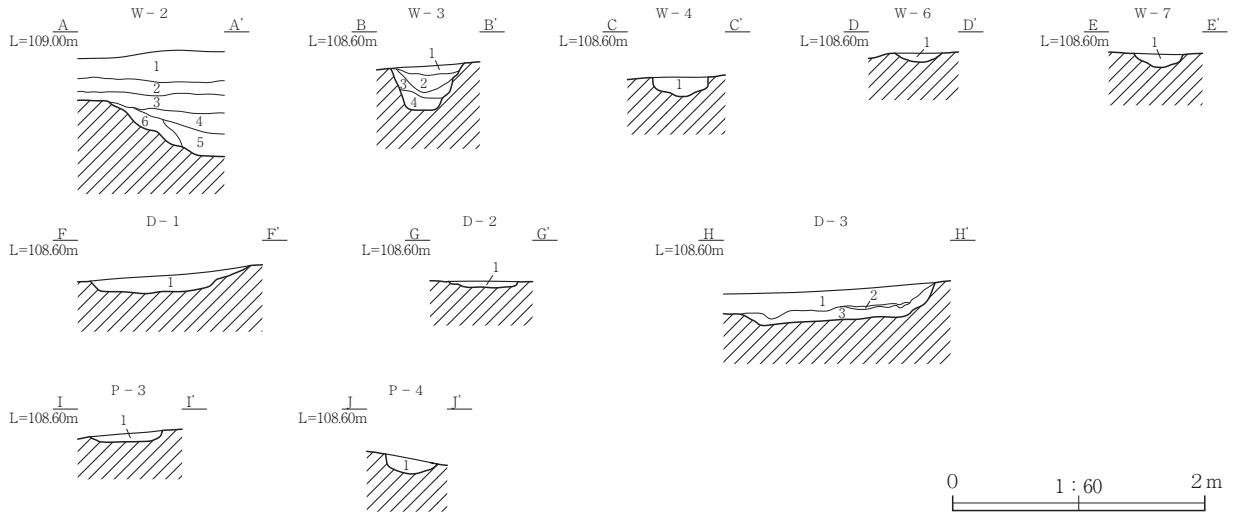


Fig.10　W－１号溝（４）

W－2～4・6・7、D－1～3、P－3・4





W－２号溝　SPA
1　基本土層Ⅰ層土
2　基本土層Ⅱ層土
3　暗褐色土（10YR3/4）　白色軽石を少量、焼土粒・炭化物を微量含む。締り有り、粘性有り。
4　暗褐色土（10YR3/4）　白色軽石を少量含む。締り有り、粘性有り。
5　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土層。白色軽石を少量含む。締り有り、粘性有り。
6　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土層。総社砂層粒を少量含む。締り有り、粘性有り。

W－３号溝　SPB
1　暗褐色土（10YR3/4）　As-B軽石混土層。総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性やや強い。
2　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色砂質土層。総社砂層ブロックを少量含む。締り有り、粘性やや強い。
3　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色砂質土層。締り有り、粘性やや強い。
4　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色粘質土層。総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性強い。

W－４号溝　SPC
1　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土層。総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性やや強い。

W－６号溝　SPD
1　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土層。締り有り、粘性やや強い。

W－７号溝　SPE
1　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色粘質土層。総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性やや強い。

D－１号土坑　SPF
1　黒褐色土（10YR3/2）　総社砂層ブロックを少量、炭化物を微量含む。締り有り、粘性強い。

D－２号土坑　SPG
1　暗褐色土（10YR3/3）　粘質土。総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性強い。

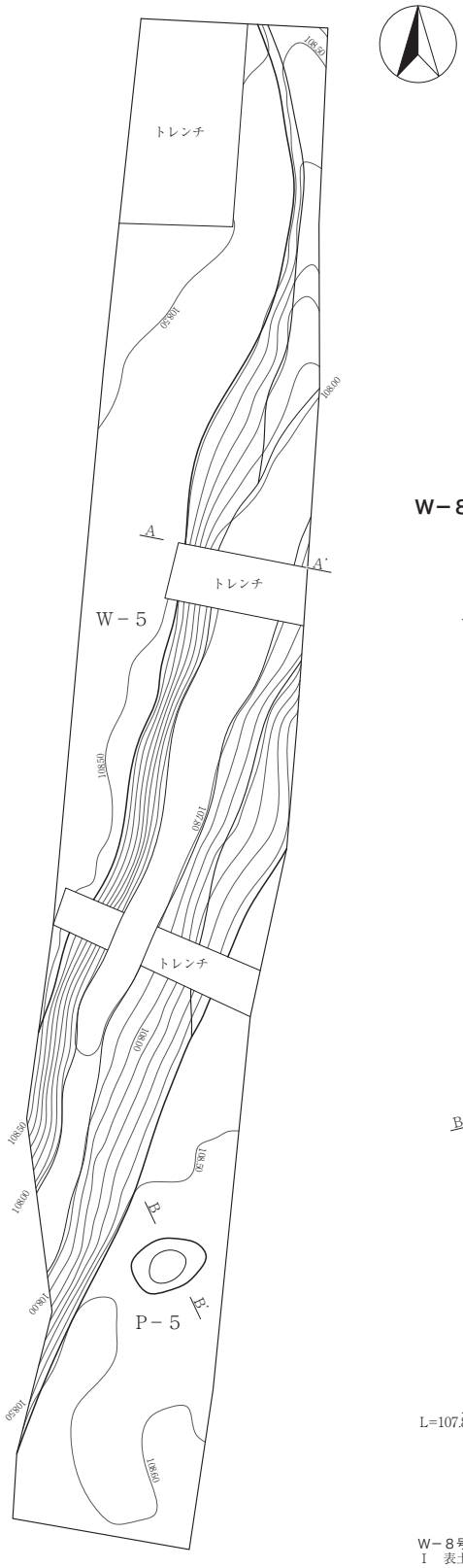
D－３号土坑　SPH
1　暗褐色土（10YR3/3）　砂質土。総社砂層ブロックを微量含む。締り有り、粘性やや強い。
2　黒褐色土（10YR3/2）　灰・炭化物層。締り有り、粘性有り。
3　暗褐色土（10YR3/3）　総社砂層ブロック、C黒ブロックを少量含む。締り有り、粘性やや強い。

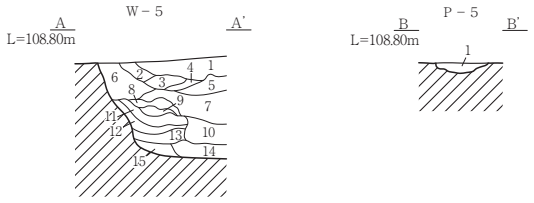
P－３号ピット　SPI
1　暗褐色土（10YR3/3）　総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性強い。

P－４号ピット　SPJ
1　暗褐色土（10YR3/3）　総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性強い。

Fig.11　W－２～４・６・７号溝、D－１～３号土坑、P－３・４号ピット

W－5、P－5

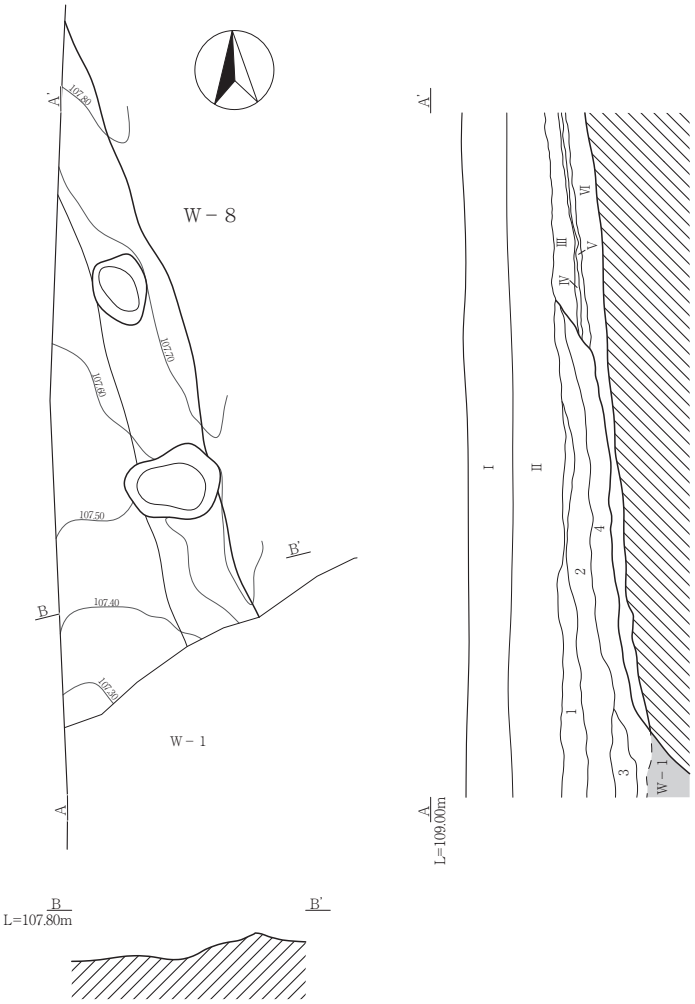




W－５号溝　SPA
1　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土層。炭化物を微量含む。締り有り、粘性有り。
2　褐灰色土（10YR6/1）　褐灰色シルト。締り有り、粘性有り。
3　黒褐色土（10YR3/1）　砂利層。締り弱い、粘性弱い。
4　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色シルト。締り有り、粘性有り。
5　暗褐色土（10YR3/3）　砂層。締り弱い、粘性弱い。
6　褐灰色土（10YR5/1）　暗褐色砂質土層。締り有り、粘性有り。
7　暗褐色土（10YR3/3）　砂利層。締り弱い、粘性弱い。
8　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色シルト。締り有り、粘性有り。
9　にぶい黄橙色土（10YR7/3）　砂層。締り弱い、粘性弱い。
10　暗褐色土（10YR3/3）　砂利とシルトの互層。締り有り、粘性弱い。
11　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
12　褐灰色土（10YR5/1）　褐灰色シルト。砂利が少量混じる。締り有り、粘性有り。
13　灰黄褐色土（10YR6/2）灰黄褐色シルト。締り有り、粘性有り。
14　褐灰色土（10YR6/1）　砂利層。シルトが少量混じる。締り弱い、粘性弱い。
15　褐灰色土（10YR6/1）　砂利層。締り弱い、粘性弱い。

P－５号ピット　SPB
1　暗褐色土（10YR3/3）　総社砂層粒を微量含む。締り有り、粘性強い。

W－8



W－８号溝　SPA
Ⅰ　表土層Ⅱ　暗褐色土（10YR3/3）　白色軽石を少量含む。締り有り、粘性有り。
Ⅲ　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色砂質土主体。締り有り、粘性有り。
Ⅳ　にぶい黄橙色土（10YR7/2）　Hr-FP洪水堆積層。締まり有り、粘性有り。
Ⅴ　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色シルト層。締り有り、粘性有り。
Ⅵ　にぶい黄橙色土（10YR7/3）　Hr-FA洪水堆積層。砂質土。締まり有り、粘性有り。
1　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色砂質土主体。締り有り、粘性強い。W－１覆土。
2　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色シルト。締り有り、粘性有り。W－１覆土。
3　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色砂質土主体。締り有り、粘性有り。W－１覆土。
4　暗褐色土（10YR3/4）　暗褐色砂質土主体。締り有り、粘性有り。W－１覆土。

0　1：60　2m

Fig.12　W－５・８号溝、P－５号ピット

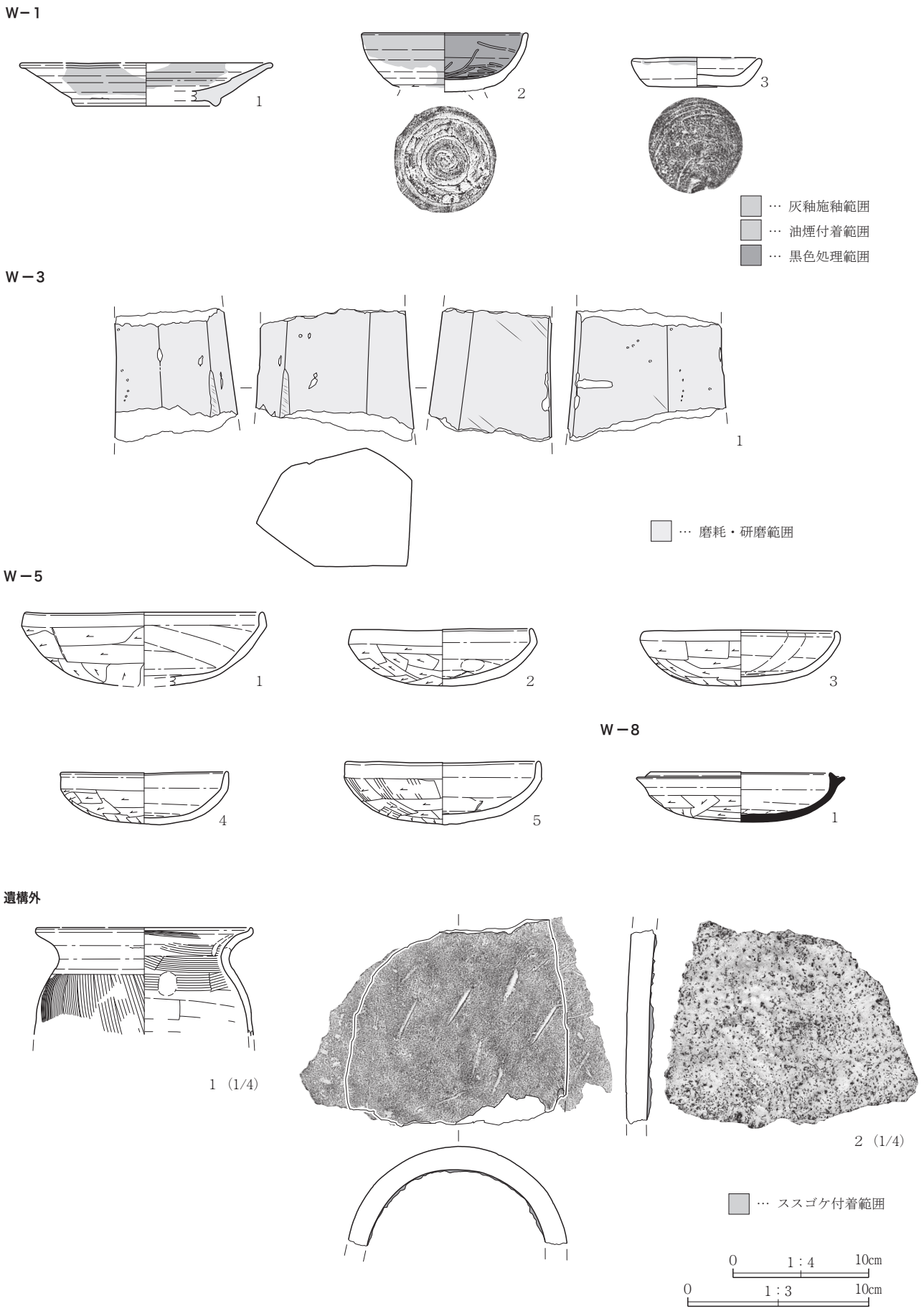

W－1
1
2
3
… 灰釉施釉範囲
… 油煙付着範囲
… 黒色処理範囲
W－3
1
… 磨耗・研磨範囲
W－5
1
2
3
4
5
W－8
1
遺構外
1 (1/4)
2 (1/4)
… ススゴケ付着範囲
0 1：4 10cm
0 1：3 10cm

Fig.13　出土遺物

Tab. 3　溝・土坑・ピット計測表

溝

遺構名	確認面	グリッド	主軸方向	確認長 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	断面形状	備考
W－1	第1面	X295～298、Y380～385	N－70°－E	10.02	(13.52)	4.35	2.75	階段状の逆台形	
W－2	第1面	X298、Y379・380	N－18°－W	2.37	(0.80)	不明	(0.42)	不明	
W－3	第1面	X296～298、Y379・380	N－80°－E	8.36	0.92	0.47	0.25～0.35	逆台形	
W－4	第1面	X296、Y379～381	N－21°－W	6.67	0.42	0.21	0.10	半円状	
W－5	第1面	X297、Y385～388	N－21°－W	10.15	1.42	0.59	0.72	逆台形	
W－6	第1面	X296、Y379	N－89°－E	2.61	0.40	0.15	0.07	浅い弧状	
W－7	第1面	X297・298、Y380	N－60°－W	2.55	0.45	0.15	0.12	浅い弧状	
W－8	第2面	X295、Y380～382	N－15°－W	5.00	(1.79)	(1.01)	0.23	浅い弧状	

土坑

遺構名	確認面	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状
D－1	第1面	X297、Y380	1.38	1.15	0.17	楕円形
D－2	第1面	X296、Y380	0.72	0.55	0.06	長方形
D－3	第1面	X296、Y380	2.37	(1.73)	0.35	方形

ピット

遺構名	確認面	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状
P－3	第1面	X297、Y380	0.57	0.51	0.08	円形
P－4	第1面	X297、Y380	0.42	0.42	0.19	円形
P－5	第1面	X297、Y388	0.62	0.42	0.10	楕円形

※P－1・2は欠番

Tab. 4　出土遺物観察表

W－1

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	中層	灰釉陶器 段皿	〔14.0〕	〔7.8〕	2.4	粘土質、白・黒色粒	堅緻	灰白	外面ロクロナデ、底部削り出し高台。口縁から体部灰釉施釉。 内面ロクロナデ、体部中位に有段。口縁から体部灰釉施釉。	1/4 残存。 灰釉陶器。
2	中層	須恵器 埦	9.2	高台部 欠損	(3.3)	白色鉱物粒、白・黒・灰色粒	酸化焔	灰白 黒	外面ロクロナデ後、下端部回転ヘラケズリ調整、底部回転糸切後、高台貼付け後、高台内回転ナデ調整。体部上半部油煙付着。 内面ロクロナデ後、底部ヘラミガキ調整。全体に厚く油煙付着、黒色処理か。	口縁の一部及び高台部欠損。 内面黒色処理か。
3	上層	かわらけ	7.2	5.3	1.6	白・黒・灰色細粒	酸化焔	灰白	外面ロクロナデ、底部回転ヘラ切り。口唇部に油煙付着。 内面ロクロナデ、口唇部に油煙付着。	口縁部一部欠損。

W－3

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	石製品 砥石	(7.3)	(8.7)	(6.8)	玄武岩	－	－	472.5	研磨面は6面。表・裏面及び右側平坦面は約5㎝幅の研磨面、左側面2面と表面右側の平坦研磨面は約3～4㎝幅を計る。平坦面は全て滑らかで、右側面と裏面には溝状の斜位研磨痕が複数認められる。	破片。

W－5

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	中層	土師器 坏	〔13.6〕	丸底	(4.1)	石英、黒雲母、白色鉱物粗粒	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部との境に稜を持ち、口縁部僅かに内湾、以下体部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	1/3 残存。
2	下層	土師器 坏	9.9	丸底	3.2	石英、黒雲母、白色鉱物粒	良好	明褐 黒	外面口縁部ヨコナデ、体部との境に明確な稜を持ち、口縁部内傾、以下体部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	完存。
3	下層	土師器 坏	10.9	丸底	3.1	石英、黒雲母、灰色粒	良好	明褐	外面口縁部ヨコナデ、体部との境に緩やかな稜を持ち、口縁部内湾、以下体部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、。	完存。
4	下層	土師器 坏	9.3	丸底	2.9	黒雲母、白色鉱物粒 白、チャート	良好	明赤褐	外面口縁部ヨコナデ、体部との境に稜を持ち、口縁部は直立して口唇部で僅かに外湾、以下体部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	完存。
5	下層	土師器 坏	10.8	丸底	3.5	石英、黒雲母、チャート、黒色粒	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部との境に明確な稜を持ち、口縁部僅かに内湾、以下体部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	完存。

W－8

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	Hr-FA 洪水層	須恵器 坏身	9.9	丸底	2.8	白色鉱物粒、黒・灰色粒	還元焔	灰	外面内傾する口縁部及び薄型で突出する蓋受け部回転ナデ整形、以下底部回転ナデ後ヘラケズリ調整。 内面口縁部回転ナデ、以下回転ナデ後ヘラナデ調整。	7/8 残存。 蓋受け部径 11.5 ㎝。

遺構外

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	南側調査区 表採	土師器 甕	〔16.0〕	欠損	(7.8)	石英、黒雲母、チャート	良好	にぶい橙	外面口縁部ヨコナデ、口縁は水平気味に外湾して口唇部で短く立ち上がる、頸部ヨコナデ、以下胴部上位縦位ハケ目。 内面口縁部ヨコナデ後横位ハケ目、頸部から胴部上位横位ハケ目、以下ヘラナデ。	口縁～胴部上位片。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	北側調査区 表採	瓦 丸瓦	(15.3)	(16.1)	(7.4)	白・黒・灰色粒、輝石	やや酸化焔	明赤褐 黒褐	656.3	凸面斜位ヘラナデ。 凹面は被熱によるススゴケが顕著で、凸凹が著しい。	体部中位片。 中世。

Ⅵ　まとめ

今回の調査成果からいくつかの事項に関して考察を行い、まとめとしたい。

１．Ｗ－１

２遺跡で確認されたＷ－１

本遺跡で確認されたＷ－１（以下、Ｗ－１（６））は規模・位置関係、埋土の堆積状況から西部第一落合遺跡群（１）で検出された大型の溝、Ｗ－１（同、Ｗ－１（１））と同一遺構であると考えられる。ここでは２地点で確認された溝を比較し、共通点と相違点について注目してみたい。

Ｗ－１（１）は、上幅〔17.88〕m、下幅〔13.79〕m、深さ1.85 ～ 2.37 m。　Ｗ－１（６）は上幅（13.52）m、下幅4.35 m、深さ2.75 mと、上下幅に関してはＷ－１（６）よりＷ－１（１）の方が広い結果となっている。下流部は上流部より幅が広くなると考えられることから、Ｗ－１（６）が上流部、Ｗ－１（１）が下流部と想定され、水の流れが東から西であったことが想定される[(1)]。

それぞれの底面の標高値はＷ－１（１）が105.55 ～ 105.78 m、Ｗ－１（６）が105.69 ～ 105.80 mとあまり差がみられない。底面の状況は主軸方向に沿って溝状の凹凸がＷ－１（１）で確認されている。水流により底面が削られた痕跡と考えられる。断面形状は台形と共通しているが、Ｗ－１（１）は幅が広い台形、Ｗ－１（６）は幅狭く、中段を持つ階段状の台形と違いがみられる。

埋土に関しては大きな違いは見られない。底面から中位にかけてはシルト、砂質土、粘土を主体とした土層が堆積しており、これらは流水によって運ばれた土砂であると考えられる。As-B 軽石層の下層には粘質土層が厚く堆積している。As-B 軽石降下時には水の流れはすでに弱まっており、泥が溜まる湿地のような景観であったと想像される。土層断面においては As-B 軽石層を掘り込むような溝の断面が確認できる。As-B 軽石降下後は小さな溝へ移り変わり、絶えず水が流れていた様子が窺える。Ｗ－１（１）では江戸時代頃に埋められたと考えられる埋め土（総社砂層･暗褐色土粘土のブロック状の土）が確認されているが、Ｗ－１（６）ではその状況は見られない。

以上、近接している場所から検出していることもあるため共通する点は多いが、断面形状については違いがみられた。また平面形状についても、Ｗ－１（６）は次項で述べる溝状遺構と平場状遺構が付随している影響から、Ｗ－１（１）の形状との差異がみられる。

溝状遺構と平場状遺構

Ｗ－１の北側立ち上がり部で溝状遺構と平場状遺構が確認された。覆土状況やＷ－１との位置関係からＷ－１に付随する施設である可能性が高いと考えられる。ここではこの２つの遺構について検討を行い、どのような性格の遺構であるのか想定してみたい。

溝状遺構は平面図ではＷ－１から三角状に突出する遺構である。底面は南へ向かって傾斜している。覆土に砂・砂利等の水が流れた痕跡は確認されていないことから、排水用の溝であったことは考え難い。平場状遺構は隅丸方形状を呈し、比較的平坦な底面を有する[(2)]。南側はＷ－１に接し、北・西側はやや直立気味に壁が立つ。この２つの遺構の特徴から、溝状遺構は平場状遺構へ降りていくための通路、平場状遺構はＷ－１際で作業する空間（作業場）であったのではないかと考えられる。この作業場はＷ－１で水を汲む等の水場として使用されたり、この場所が船着き場で荷揚げをしていたのかもしれない。それらを示す痕跡や遺物が出土していないため想像の域を出ることはないが、可能性としては決して低くないと思われる。

Ｗ－１の成りたち

これまでのＷ－１や周辺域の調査成果を基にＷ－１の成りたちについて推測してみたい。かつて牛池川

と染谷川に挟まれた台地上には相馬ヶ原扇状地を源とする中小河川が存在していた。両河川の流れが現在の位置に落ち着くと中小河川は埋没し、浅く緩やかな台地上の低地帯と化していったと考えられている（中村2018）。Ｗ－１の前身はこの低地上を流れていた小河川であったと推測される。小河川はやがて人為的に開削され大きな溝へ生まれ変わり、豊富な水を取り入れることになる。人の手による開削を示す痕跡は確認されてはいないが、その規模・形状や牛池川と染谷川との位置関係から考えて、人為的に掘削が行われた可能性は高いと考えられる。牛池川から取り込んだ水は、溝の南側に広がる台地上に営まれた集落域へ配水していた可能性が高い。台地の集落は８世紀以降に増加する傾向がみられる。Ｗ－１から引水した溝（西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－２～４）も出土遺物から８・９世紀の時期を示していることから、Ｗ－１の開削時期も近い年代であったのではないだろうか。

２．Ｗ－３

調査区の北隅で確認されたＷ－３はその走行方向から、推定東山道国府ルートの駅路に付随する側溝である可能性が考えられる。落合地区周辺は推定東山道国府ルートの通過地点として以前から研究者の注目を受けていた地域である。推定東山道国府ルートは高崎市八幡町付近から上野国府推定地である前橋市元総社町付近に向かって北東方向（Ｎ－64°－Ｅ）に走行する駅路であり、落合地区はこの東側延長部にあたる。しかし、これまでの落合遺跡群の調査では駅路・側溝と考えられる遺構の検出には至っていない。

どこに駅路が通っていたのだろうか。Ｗ－１の南側台地上は７世紀後半以降、集落域が広がることから可能性は低いと考えられる。可能性が高い場所は現在の小河原用水南側の現道下、あるいはＷ－１の北側ではないだろうか。今回の調査でＷ－１北側の状況を確認することができた。そこへ東西方向に走行するＷ－３が検出された。駅路の側溝である可能性が考えられたため、Ｗ－３北側の拡張調査を行ったが、残念ながら硬化面などの道路遺構を示すような痕跡は確認できず、同じ東西方向に走行する小さな溝（Ｗ－６）のみが検出された。今回の調査成果だけでは東山道駅路の側溝であると断定することは難しい。判断材料が少ないため今回は側溝である可能性の提示としたい。今後行われるであろう本遺跡の北側に隣接する区画の発掘調査の成果に期待したい。

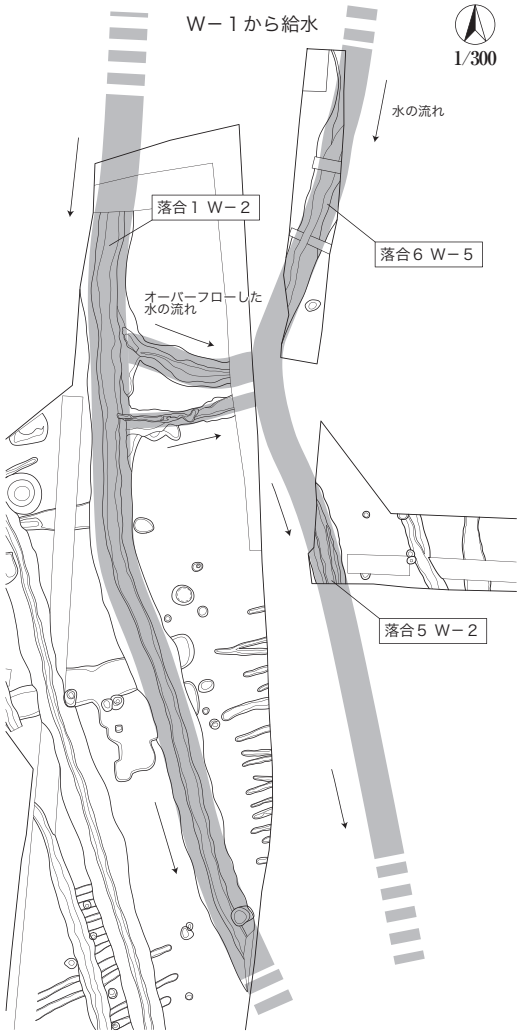


Fig.14　Ｗ－５周辺の溝

３．Ｗ－５

Ｗ－５（以下、Ｗ－５（６））はＶ章において、西部第一落合遺跡群（５）１区Ｗ－２（同、Ｗ－２（５））と同一遺構であると述べた。また、この溝は西隣で確認されている西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－２（同、Ｗ－２（１））とも接続する関係にある。これまでの調査成果を基に関係性について説明する。

Ｗ－５（６）とＷ－２（１）は共にＷ－１から供給された水を下流域へ流していた溝である。Ｗ－２（１）から

は小さい溝２条（Ｗ－２ａ・ｂ（１））がＷ－５（６）へ接続する。この小さい溝はＷ－２（１）と比較して底面が高いことからＷ－２（１）からオーバーフローされた水を流す役を担っていたと考えられる。そうすることによりＷ－２（１）の水量を調整することができ、安定的に水を流すことができたと推測される。

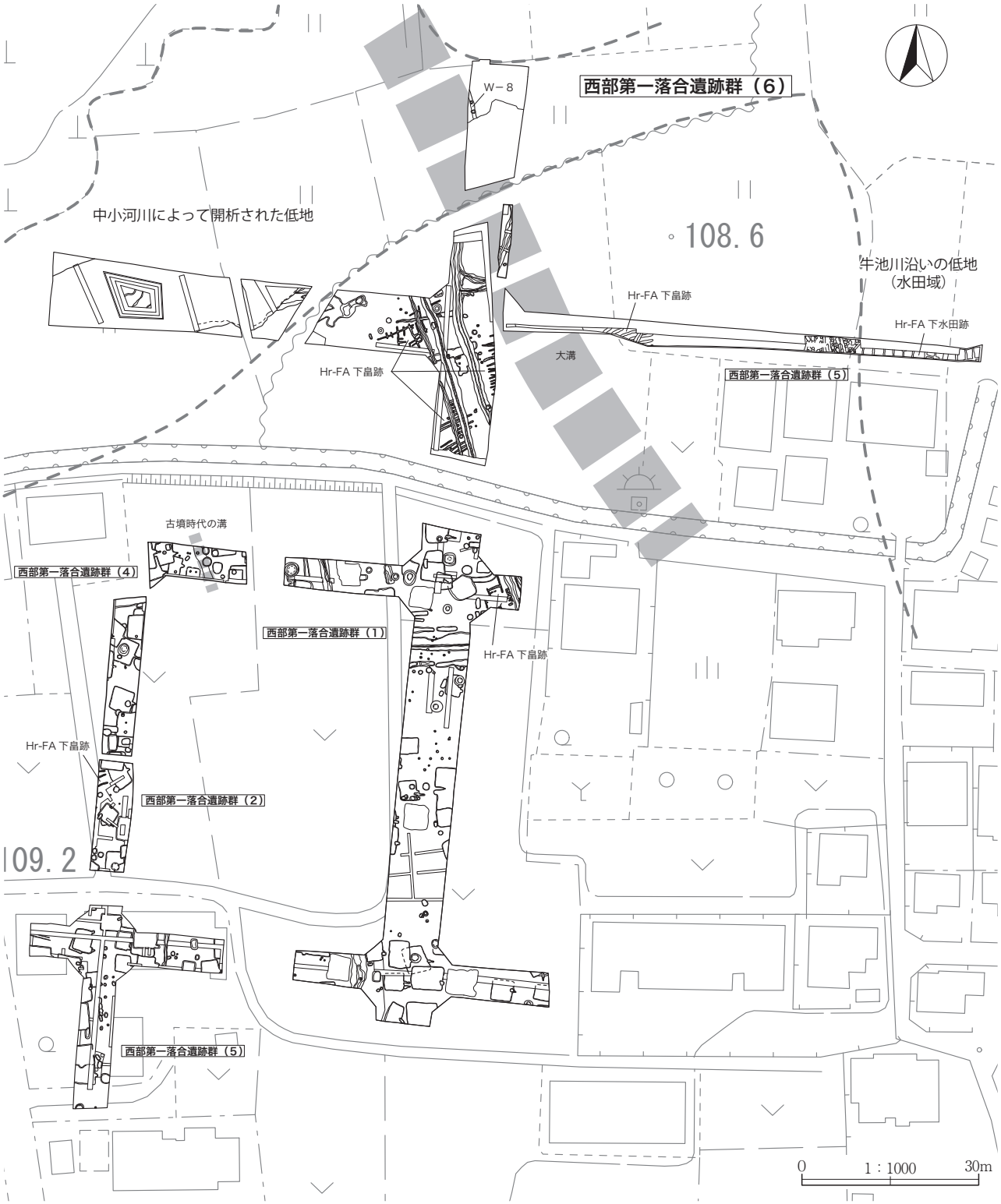


Fig.15　西部第一落合遺跡群（６）周辺の古墳時代の景観想定図

４．本遺跡周辺の景観想定

落合遺跡群周辺の古墳時代と古代の景観については『西部第一落合遺跡群（５）』の「Ⅴ章　まとめ」にて記した。それに今回の調査成果を付け加えて、改めて周辺景観について概観してみたい。

古墳時代

落合地区において概期の竪穴建物跡は少なく[3]、大溝周囲には畠、牛池川沿いの低地には水田などの生産遺

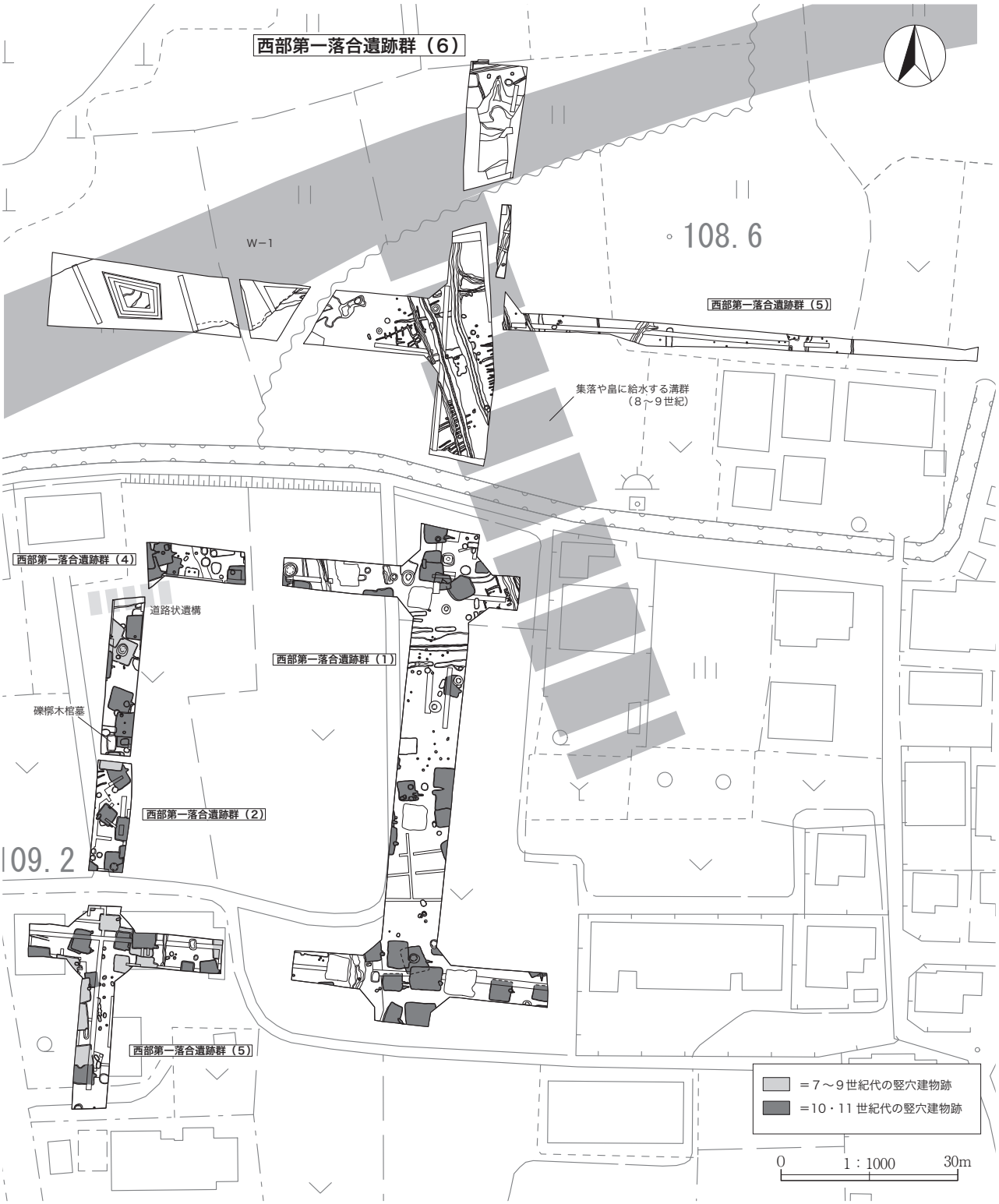


Fig.16　西部第一落合遺跡群（６）周辺の古代の景観想定図

構が分布する。集落域は落合地区の周縁部にあたる牛池川の左岸や染谷川の両岸の自然堤防上に営まれていたと推測される。落合地区はその集落に住まう人々の生産域であったと考えられる。

古代

古代になるとＷ－１より南側で集落が広がり始める。７世紀後半から11世紀にかけての竪穴建物跡が確認されていることから、連綿と集落が営まれていたと考えられる。Ｗ－１周縁部南側ではＷ－１より引水し下流域へ配水するための溝[4]が作られる。Ｗ－１北側（本遺跡）にも溝が数条確認されている。Ｗ－１周縁部にまで集落域が広がらないことを考慮すると、７世紀後半頃にはＷ－１あるいは前身となる溝があり、それを避けるように集落域が形成されていったと考えられる。

５．焼けた瓦

遺構外遺物で図示した丸瓦（巻頭図版２）は北側調査区の表土層から出土している。中世の所産と考えられるこの瓦は、内面にのみ煤焦げが広く付着し、まるで火災にでもあったような状態がみられる。

本遺跡の北西に位置する釈迦尊寺は、古くは現在の位置ではなく北東約400ｍの小字八日市場地内にあったと伝わっている（近藤1990）。永禄六年（1563）、甲州勢（武田勢か）の兵火により寺は焼失してしまう。その後、末寺である「竜松寺」があった現在の場所に移ったと寺に伝わる[5]。この瓦が焼失した釈迦尊寺の瓦であるという根拠はないが、現在の釈迦尊寺の南東に位置する本遺跡まで流れてきたのではないかと想像してしまう。

註釈

１．現在、調査区の南側には小河原用水が流れており、Ｗ－１と同様に東から西へと水が流れている。

２．溝の傾斜地に作られた平場状の遺構は元総社蒼海遺跡群（145）で確認されている（Ｔ－１～３）。山側に壁を持ち平坦な底面を有するこれらの遺構は総社砂層の切石を採掘した際の作業場と考えられる。

３．西部第一落合遺跡群（５）２区Ｈ－14は古墳時代（６世紀後半）の竪穴建物としていたが誤りであり、７世紀後半の年代と訂正したい。

４．西部第一落合遺跡群（１）Ｗ－２～４

５．「釈迦尊寺開闢由来書」について（前橋市教育委員会　2004　「Ｉ文化財調査委員による調査」『前橋市文化財調査報告書　平成16年度』）

参考文献

論文

近藤昭一　1990　「釈迦尊寺純銀造阿弥陀如来坐像」『史迹と美術』605　史迹美術同攷会

中村岳彦　2018　「”推定上野国府”周辺の古代景観」『群馬文化』第332号　群馬県地域文化研究協議会

市町村史

前橋市史編さん委員会　1971　『前橋市史』第１巻

群馬県史編さん委員会　1989　『群馬県史』通史編３　中世

図録

群馬県立歴史博物館　2001　『古代のみち　－たんけん！東山道駅路－』

報告書

前橋市教育委員会　2004　『前橋市文化財調査報告書　平成16年度』

前橋市教育委員会　2020　『西部第一落合遺跡群（１）』

前橋市教育委員会　2021　『元総社蒼海遺跡群（145）』

前橋市教育委員会　2021　『西部第一落合遺跡群（２）』

前橋市教育委員会　2022　『西部第一落合遺跡群（３）』

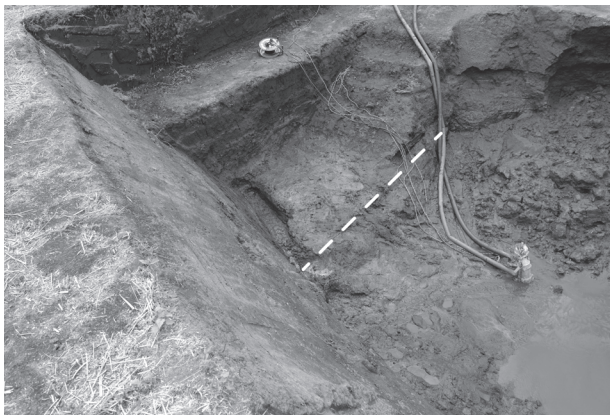
前橋市教育委員会　2022　『西部第一落合遺跡群（４）』

前橋市教育委員会　2023　『西部第一落合遺跡群（５）』

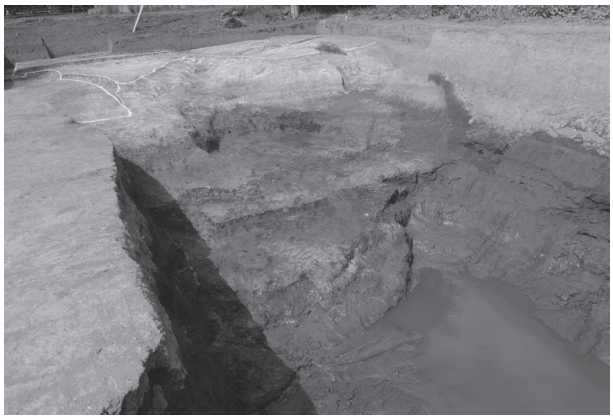
調査区全景（上が東）

Ｗ－１全景（南西から）
（破線は溝主軸方向を示す）

Ｗ－１南側壁面近景（西から）
（破線は溝の立ち上がりを示す）



Ｗ－１南側近景（東から）
（破線は溝の南側ラインを示す）



Ｗ－１北側立ち上がり部全景（南から）

Ｗ－１溝状遺構全景（北から）

Ｗ－１平場状遺構全景（南東から）

Ｗ－１全景（北から）

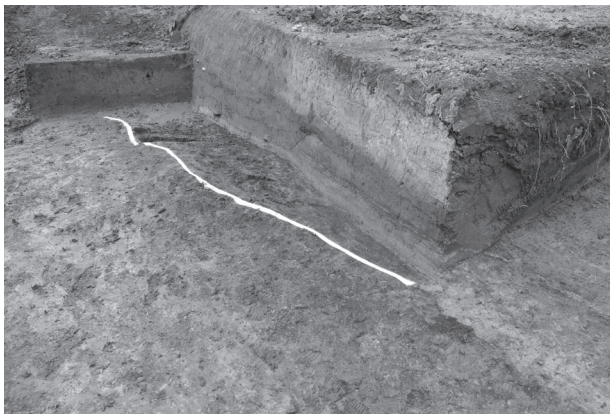
Ｗ－２全景（南から）

Ｗ－３・６全景（西から）

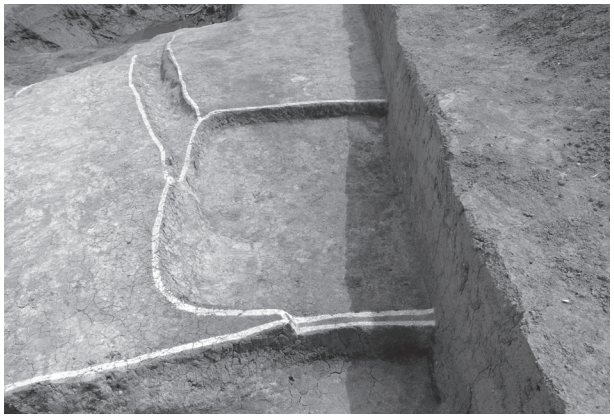
Ｗ－３全景（東から）

Ｗ－４全景（南から）

Ｗ－７全景（西から）



Ｗ－８全景（北から）

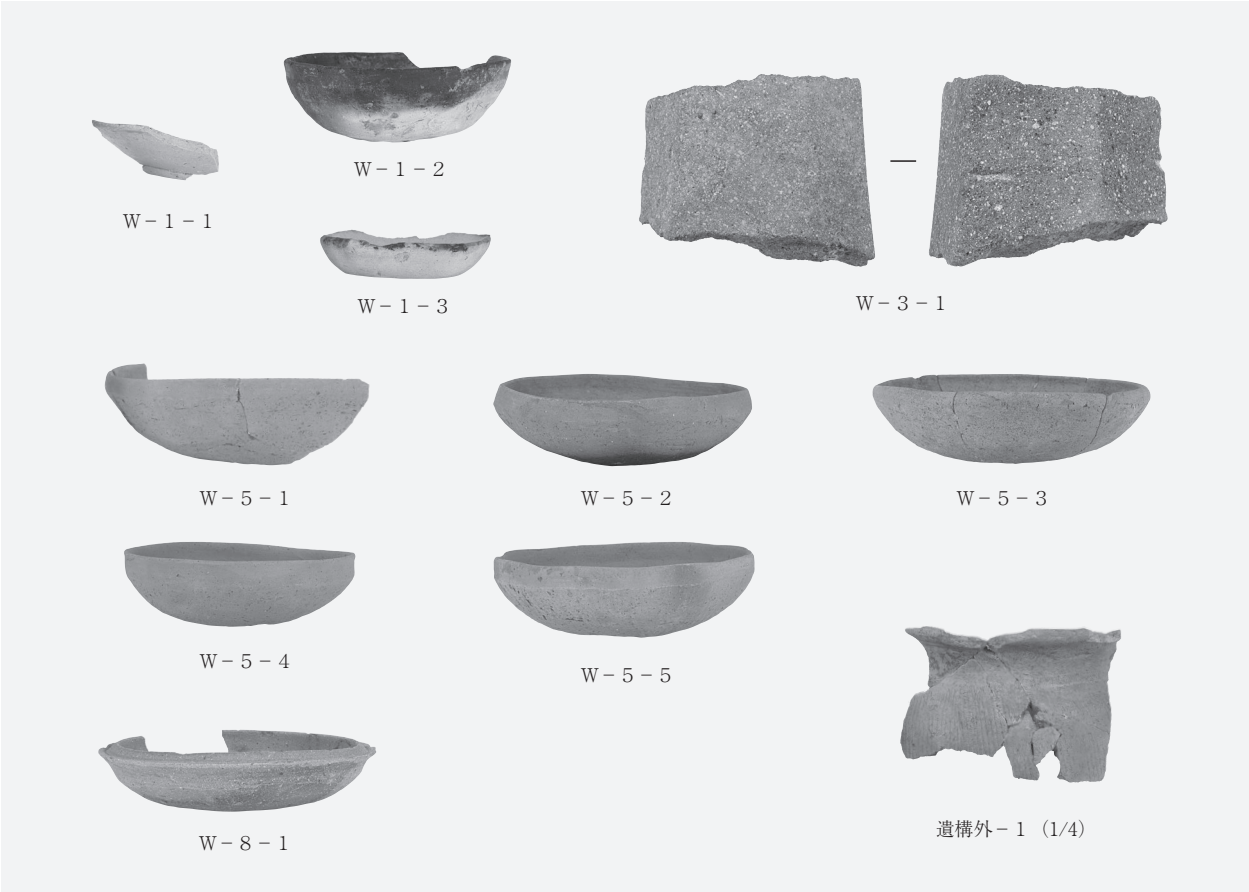


Ｄ－３全景（北から）

Ｗ－５全景（南から）

Ｄ－１、Ｐ－３・５全景（南東から）

総社砂層堆積状況（西から）



報告書抄録

カタカナ	セイブダイイチオチアイイセキグン（6）
書名	西部第一落合遺跡群（6）
副書名	前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371－0031　群馬県前橋市国領町２－21－12
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371－0853　群馬県前橋市総社町３－11－４
発行年月日	2025年１月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	位置 北緯	位置 東経	調査期間	調査面積	調査原因
セイブダイイチオチアイイセキグン 西部第一落合遺跡群（6）	グンマケン マエバシシモトソウジャマチ 群馬県前橋市元総社町 2510-2、2511の各一部	102016	6A293	36°23'00	139°02'19	20240710 ～ 20240830	265㎡	前橋都市計画事業 西部第一落合 土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西部第一落合遺跡群（6）		古墳時代	溝　1条	土師器	
		古代～中世	溝　7条 土坑　3基 ピット　3基	灰釉陶器 土師器 須恵器	・古代から中世まで流水していた大型の溝・堀跡

西部第一落合遺跡群（6）
前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2025年１月17日　印刷
2025年１月31日　発行

発行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371－0853　群馬県前橋市総社町３－11－４
TEL　027-280-6511
編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社